

平成7年度市川市文化祭参加
市川市文化会館10周年記念

第247回市響

交響楽の午後

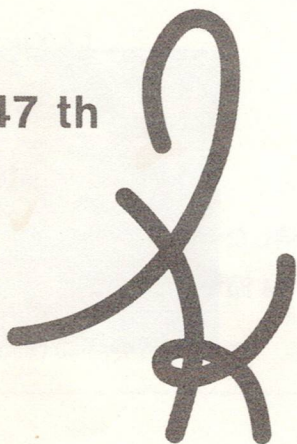
平成7年7月9日(日)

午後2時開演

市川市文化会館大ホール

1995

247 th



主催 市川市教育委員会 市川交響楽団協会
後援 千葉交響楽団協会

プログラム

楽劇「神々のたそがれ」より…………… R. ワグナー
Götterdämmerung R. Wagner
(1813-1883)

ジークフリートのラインへの旅立ち
Siegfried's Rheinfahrt

ジークフリートの葬送行進曲
Trauermusik beim Tode Siegfrieds

演奏時間(約25分)

————— 休 憩 —————

交響曲第4番ト長調「大いなる喜びへの賛歌」…………… G. マーラー
Symphonie Nr.4 G-dur G. Mahler
(1860-1911)

第1楽章 Bedächtig, nicht eilen おちついて、いそがずに
Breit gesungen はばひろく歌う

Plötzlich langsam 突然ゆっくりと、
und bedächtig いそがずに

(ソナタ形式)

第2楽章 In gemächlicher Bewegung. Ohne Hast
ゆっくりとしたテンポで、いそがずに

(スケルツォ)

第3楽章 Ruhevoll しずかに

(主題と変奏)

第4楽章 Sehr behaglich 楽しげに

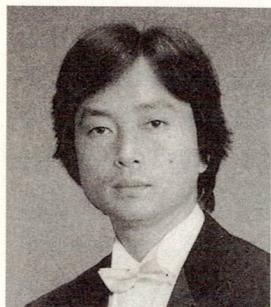
Plötzlich frisch bewegt 急に生きいきしたテンポで

(4節からなるソプラノ独唱付)

演奏時間(約55分)

指 揮 田久保 裕 一
ソプラノ 近 藤 千加枝
ソロ・コンサートマスター 木佐貫 美 保
演 奏 市川交響楽団

プロフィール



田久保 裕一〈指揮〉

東京学芸大学音楽科卒。指揮を、故・伴 有雄、伊藤栄一、汐澤安彦の各氏に師事。

92年～93年、スイス・ルガノにおいて、リヒャルト・シューマッヒャー氏に、またウィーンにて、ウィーン国立音楽大学のカール・エスターライヒャー教授、湯浅勇治、ザルツブルク・モーツァルテウム音楽院のハンス・グラーフ教授の各氏に師事。ウィーン・プロ・アルテ・オーケストラを指揮。93年アウアースベルク宮殿主催の特別演奏会において、ウィーン・レジデンツ・オーケストラを指揮。

94年ルーマニアにて開催された第4回ディヌ・ニクレスク国際指揮者コンクールにてグランプリを受賞、日本人として初めての優勝に輝いた。また、同時に審査員特別賞「ルーマニア現代音楽演奏賞」と聴衆特別賞もあわせて受賞。ルーマニア国立ジョルジュ・ディマ・フィルハーモニー交響楽団を指揮、ルーマニア全土に放送された。

現在、桐朋学園付属子供のための音楽教室講師。日本指揮者協会会員。



近藤 千加枝〈ソプラノ〉

千葉県市川市出身。武蔵野音楽大学及び同大学院声楽科卒。声楽を東学・杏子、大滝雄志及びH. ペッツォルト各氏に師事。同大学の定期演奏会にメンデルスゾーン曲、交響曲第二番「讃歌」にソリストとして出演。同大学及び市川市の新人演奏会にも選ばれる。最近ではドンジョバンニにドンナアンナ役で出演し好評を博す。

現在、二期会の研究生で市川交響吹奏楽団にも在籍したことがある、市響とは縁の深い将来有望な若い声楽家です。

市川公民館音楽ギャラリーで「オペラ講座」に出演中。



木佐貫 美保〈ソロ・コンサートマスター〉

横浜生まれ。3歳から聴音・ピアノ、5歳でヴァイオリンを始める。第40、42回全日本学生音楽コンクール中学校の部入選、第43、44回同高等学校の部入選。多摩フレッシュ音楽コンクール'94弦楽器部門第2位。'92年秋期・桐朋学園オーケストラ演奏会（於、調布、市川、群馬・太田）のコンサートマスターとしてソロ付き楽曲を含む全プログラムに出演。'94年1月「現代舞踊公演・風の彩譜」と共演したアンサンブル・アマデウスのソロ・コンサートマスターとしてコンチェルトを演奏（於、東京文化会館大ホール）したほか、ジョイントコンサート等で名曲小品集独奏、また室内楽を含む数々の演奏会に出演。'95年12月開催の千葉・TEPCO地球館「フレッシュコンサート・ヴァイオリンリサイタル」に出演予定。これまでに、裕美穂子、山岡耕祐・みどり、辰巳明子の各氏に師事。桐朋女子高・音楽科を経て、現在、桐朋学園大学音楽学部演奏学科4年在学中。

元、市響ジュニアオーケストラ団員。佐倉市ユーカーリが丘在住。

《狩人の葬列》

— マーラー、ウィーン、ヴァーグナー —

シューベルトの親しい友人でもあった画家シュヴィントに「狩人の葬列」と題する版画がある。死んだ狩人を納めた棺を、こぞって森の動物たちが担いで行進するさまを描いた横長の画面のなかには、大小さまざまな獣類鳥類が、或いは松明をかかげ、或いは旗を振りながら、それぞれに思い思いの楽器を奏でて弔いの列に加わっている。おもえばかつて自分たちを追い回したはずの狩人に、追われていた側の動物が弔いの手向をするというのも妙ななはしだが、ことごとく後ろ足だけで立って、人間である狩人とあたかも同じ姿勢を苦勞してとろうとするかのように歩む四つ足の同朋(はらから)の行列からは、どこか、罪のない諧謔とそこに秘められた哀しみがそこはかとなく伝わってくる。

一九一一年遠隔の任地ニューヨークで、奇しくもブゾーニの「悲歌的子守歌—母親の棺に寄せる男の子守歌」という、後から思えば意味深長な題名の曲を演目に含む二月の演奏会を最後に、重病に倒れたマーラーは、回復の見込みもしだいにうすれ、新手の療法を試みにむなしくパリに赴いたあと、五月九日によく焦がれていたウィーンへの帰還を果たす。オリエント急行を用いたその帰途の旅は、途中の停車駅毎に容体を尋ねようとする記者の群が待ち受ける、さながら瀕死の王の帰還もかくあるべしと思わせるに足るものであったという。午後遅くウィーンは西駅に到着したマーラーは、ただちに病院に運ばれ花束の洪水に迎えられるが、苦痛と衰弱の募るまま、一〇日を待たずして一八日の夜、不帰の客となる。

*

ところで、先に触れた「狩人の葬列」が着想を与えたという、コントラバスのソロから始まる第一交響曲の第三楽章「葬送行進曲」に始って、およそマーラーの音楽は葬列と浅からぬ関わりがある。ウィーンで学んだあと、各地を点々としながら小都市の歌劇場でオペラの指揮をするため旅回りに明け暮れる下積の時代を経て、たまたま第一交響曲の完成直後、ブダペスト王立歌劇場の監督に就任、ブラームスを驚嘆させた〈ドン・ジョヴァンニ〉の上演をはじめ、めざましい成果を上げるものの、支配人の交代に伴って、ヴァーグナーへの「過度」の嗜好を咎められて辞職、即座にハンブルク市立歌劇場に第一指揮者として迎えられる。当地の同僚に、かつてのヴァーグナーの弟子でありまた妻をめぐって師匠とのあいだの複雑な関係に苦しんだビューローがいたが、彼は年若いマーラーを「ハンブルク劇場のピュグマリオン」と呼んで重んじてくれたという。マーラーもまたビューローの演奏会には欠かさず足を運んだが、この先達の評価は、なによりもまず「練習もせずオーケストラの兵隊どもを自分のリズムに合せて踊らせる」ことのできたマーラーの演奏家としての才を買ったのであった。あるとき第二交響曲の冒頭楽章〈葬礼〉をピアノで弾いて聴かせるとビューローは仰天して、これに比べれば〈トリスタン〉もまるでハイドンの交響曲のようだと評し、「気遣いのような仕草をしてみせた」という。この曲の終楽章に使う歌の文句を探しあぐねていた作曲家は、ほどなく身罷ったこの恩人の葬儀に参列して、偶々そこで教会の聖歌隊によって歌われたクロプシュトックの「復活」をあたかも天啓の

ように受け取ると、ただちに自作に採用したのである。出世作となったこの第二交響曲につづく第三にも、葬送行進曲は無縁でない。即ち曲頭を飾る長大な「牧神が目覚める」の楽章がそれに当るが、ただしここでは単なる葬送を越えた、森羅万象の一切を動員しながら複雑して進行する膨大な行進曲に膨れ上がる。曲全体の規模も尋常のものではなく、はじめは都合七楽章として構想されたが、のちに終曲は次作第四番に回されることとなる。

一八九二年以来避暑地への往復にいつもウィーンを通過していたが、この都こそは学生時代以来マーラーにとって常に変わらず「理想の都市」でありつづけた。ハンブルクにあってもたえず「南方からの神の呼び声」を心待ちにしていた彼にとって、しかし当時ますます反ユダヤ主義が募る一方のこの都への招聘は、衆目の一致してまず有り得ないこととみなされていた。その分だけ、一八九七年四月八日のウィーン宮廷歌劇場へのマーラーの任命は、敵味方を問わず、まさに青天の霹靂と映ったのである。おりしもブラームスの葬儀の二日後、またウィーン分離派の設立五日後のことであった。

着任早々、オーケストラの指導のみならず、劇場政策にも示した並みならぬ力量を認められて、その年の秋には正式に劇場監督に就任、以来この都市の音楽活動全般にあまねく支配力を振るう。歌劇場の演目から、それまで持て囃されていたイタリアもの、フランスものを減らして代りにドイツ、オーストリアの選り抜きの傑作、即ちモーツァルト、ベートーヴェン、ヴェーバー、ヴァーグナーの諸作品をとりあげる。それまでの慣習を打破してヴァーグナーの楽劇を省略なしに演奏したが、以来毎年きまって上演した〈指輪〉四部作のなかでも例えば〈神々の黄昏〉の場合、初年度には「ラ

インの旅」につづくヴァルトラウテとブリュンヒルデのやりとりを復活、次の年には序幕のノルンの場面の神秘が初めてウィーンの観衆の前に姿を現した。ジークフリートの葬送行進曲は初めの年には管弦楽の出来が必ずしもマーラーの期待に沿うものでなかったが、ようやく次年度にはそれを挽回して余りある、聴衆を震撼させる名演をきかせたという。

かくて就任の後しばらくはもっぱら歌劇場監督としての仕事に没頭したかにみえて、じつはその間も作曲の筆を休めていたわけではない。念願の主都に戻ってからの第一作にあたる第四交響曲のウィーン初演は、しかし惨憺たる不評を蒙ったのである。それに先立つ一九〇一年の一月一日、その冬のシーズンにウィーン、ミュンヘン、ベルリンで予定していたこの曲の初演に備えて、目下の手兵フィルハーモニカーを相手に最初の譜読みのリハーサル(レーゼプロベ)を行なった。譜面を印刷前に音に出して確かめておきたいとも思ったのであるが、その折、楽員たちの表情に現れた無言の抵抗に作曲家は、あたかも敵陣のただ中にいるような気分を味わった。

自ら曲を解説して日く、「ぞっとするような未知の高みの世界の晴朗さ」を帯びた前三楽章の後に来る終楽章「天上の生」は、すでに述べたとおり元来は前作第三交響曲から転用されたものであるが、ここでは「蛹の状態でありながらすでにこの高き世界に属している子供がすべてを説明する」。「一樣な空の青色、それは変化し対照をなす様々な色合などよりはるかに捕え難いものだが、これが全体の基調をなす気分なのだ。ときに翳りを帯びて、不気味な、身の毛のよだつようなものになったりもする。しかしそれは天そのものが曇るのではない。むしろ天は永遠に輝き続け、ただそれを見上げる我々にとってのみ突然気味の悪

い様相を呈するのだ。ちょうど晴天の日に木洩日のある森のなかで、唐突な驚愕に襲われるように。神秘的で、錯綜し、髪が山のように逆立つほど不気味なのがスケルツォだ。だがその次の、すべてが溶け合うアダージョを聴けば、それがそんなに性の悪いものではなかったとわかるだろう。」

アルマとの結婚の直前、一九〇一年一月二五日ミュヒェンでの初演の後、翌年正月のウィーン初演で、巨大で超人的な規模の数々の交響曲の後に登場したこの「ノーマル」なサイズの一見アルカイックな姿の曲は、しかしウィーンの聴衆から、却って不真面目なまがいのものと退けられ、かねてからマーラーの「創造力の欠如」を主張する誹謗者たちをそれにこそ鬼の首をとったように喜ばせた。むしろ相変わらず晦渋かいじゆう龐大な曲を作り続けていた方が受け入れられやすかったかも知れないことは、わけても大規模な第三交響曲が一九〇二年六月ラインラントはクレーフェルトの音楽祭で意外にも熱狂的な喝采を以て迎えられた事実からも推察される。それまで殆ど自腹を切って自作の上演を行ってきたのが、この成功以来、事情変ってひとかどの作曲家として認められるにいたり、同曲は二年後のウィーン初演でも人が入り切らないほどの大成功を納め、再演もされた。それとは裏腹に、一方でウィーン古典派に敬意を表したといってもよいこの第四番の古雅な諧謔かいぎやくを秘めた曲想は、もっぱら当地の聴衆を愚弄する不謹慎なわざときめつけられたが、案外当時の聞き手はそこに、無意識のうちにもこの透明な器に盛られた毒を嗅ぎつけていたのかも知れない。作曲者自身みずからの最上の作に数えていたとされるその第三楽章は例えば、曲の進行とともに明暗陰陽の対照をますます極端にしながらいに爆発にいたると嘘の様に静まりかえっ

て、そのあとに来るものは終曲の、一切の諷刺や皮肉から免れた殆ど白痴的に甘美なしかし甚だ地上的な天国の有様である。対立はもはや止揚されぬまま平然と並存を許される。このいわば鏗かすがいの外れた悦楽境への入口はしかし奈落と隣り合わせにあって、落下も上昇も紙一重の世界がここに開かれているといったらよいか。

*

ウィーンはグリンツィング墓地でのマーラーの埋葬式は、故人の死後約一ヵ月を経た六月一七日にとり行なわれた。その模様を描いたシェーンベルクのきわめて印象深い絵があるが、おそらく当日は風の強い日でもあったのか、群なす雲の渦巻く雁金色の空の下、墓穴の両側に並んだ参列者とともに、墓の枕元に立つ樹木まで弓なりに身を屈めて、あたかも死者を悼んでいるかのようだ。この絵のみならず、敬愛措く能わざる恩人を追悼すべくシェーンベルクはその作品一九のピアノ曲集の終曲を作曲したが、そこには左右の手であたかも葬列の鐘の音を模したように相も変らぬ二つの和音が交互に打ち鳴らされるのである。

須永恆雄(団員・ドイツ文学)



曲 目 解 説

楽劇「神々のたそがれ」より

R. ワグナー

オペラの分野において革命的な作品を残したワーグナーですが、とりわけ畢生の大作と言えるのが“ニーベルングの指環”であり、今日あるバイロイト祝祭劇場は、本来この作品を上演するためにワーグナー自身が建設したものです。オペラの全体は序夜“ラインの黄金”、第1夜“ワルキューレ”、第2夜“ジークフリート”、第3夜“神々の黄昏”の4つで構成されており、実際の演奏はつまり4日、実に15時間にも及ぶ長大な作品です。北欧の神話や伝説、中世の叙事詩などをもとにワーグナー自身が台本も手がけており、無限の権力を得られる指環をめぐる登場する様々な人物(神、人間、巨人、小人、大蛇等)が、最後には指環にかけられた呪いによって破滅への道を進む、という物語です。

ニーベルング族(小人族)のアルベリヒはライン河に眠る黄金から指環を作りあげますが、天上の最高神ヴォータンにより指環を奪い去られ、指環を手にした者に死が訪れるよう呪いをかけます。しかし、そのヴォータンも自らの築城の代償として巨人族の兄弟に指環を持ち去られますが、指環を手にした兄弟はそれを争って遂には殺し合いとなり、指環の呪いは現実のものとなります(以上序夜“ラインの黄金”)。ヴォータンは人間との間にも兄妹をもうけていますが二人は離ればなれになっています。兄ジークムントは敵に追われてある館へ逃げ込みます。その主フンディングは敵方の人間で、しかも彼の妻が妹であるジークリンデです。二人は兄妹でありながら一目で互いに引かれあい、館を出てフンディングと決闘になります。ヴォータンには二人を助けようしますが、妻フリッカにとがめられ、ジークムントを敗れさせるべくワルキューレ(戦を司る神で、ヴォータンの娘9人)の一人ブリュンヒルデを差し向けますが、二人に同情したブリュンヒルデは父の命に背いてジークムントを勝たせようとしてヴォータンの罰を受け、周りを炎で囲まれた岩山に眠らされ、その炎を超えられる英雄だけが彼女を助け出せるようにされます(以上第1夜“ワキューレー”)。ジークムントとジークリンデの間に生まれたジークフリートはアルベリヒの弟のミーメに拾われ、育てられます。彼は父ジークムント形見の剣を鑄直し、大蛇に変じた巨人ファフナーを打ち倒し、指環を手に入れます。その際に浴びた大蛇の返り血を口にしたことにより、鳥の声を理解できるようになり、小鳥の導きによって炎の壁を乗り越えてブリュンヒルデ(二人はヴォータンから見れば娘と孫?)を目覚めさせ彼女と結ばれます(以上第2夜“ジークフリート”)。アルベリヒの息子ハーゲンは父の無念を晴らし、指環を取り戻すためにジークフリートを倒す企てを立てます。妻に指環を与え、一人で旅に出たジークフリートはライン河を船で渡り、ライン湖畔に住むハーゲンと出会います。ハーゲンの罠に落ち、ジークフリートは妻のことを忘れさせられる酒を飲み、ブリュンヒルデを他の男の妻とするため炎の岩山より連れ出し、指環を誓います。裏切られたと勘違いした彼女はハーゲンの口車に乗し、背中を一突きすれば英雄ジークフリートを打ち倒せる事を教えます。ハーゲンはその急所を突いてジークフリートを殺害しますが、このときブリュンヒルデのことを思い出し、彼女もハーゲンの策略にかかったことを悟ります。彼女は指環をライン河に返し、ジークフリートと共に炎に身を投じます。ハーゲンは指環を追ってラインの奔流に呑まれ、やがて炎は神々の世界さえも焼き尽くします(以上第3夜“神々の黄昏”)。

全曲を聞く機会には相当のワーグナー狂でない限り、残念ながら非常に少ないようですが、有名な“ワルキューレの騎行(3幕への前奏曲)”をはじめ、オーケストラのみのコンサート用に編曲されたものが多くあり、また“ジークフリート牧歌”という素晴らしい曲もこのオペラの主題を題材として作曲されています。本日演奏いたします曲は2曲とも“神々の黄昏”よりとられており、第1幕でジークフリートの旅立ちの際の舞台転換に演奏される間奏曲と、第3幕で殺害された彼の遺体が運ばれる際に演奏される葬送行進曲で、オーケストラのみで演奏できるように編曲されています。

交響曲4番 ト長調「大いなる喜びへの賛歌」

G. マーラー

すず この曲の中ではすずが効果的に使われます。私は、どこかできいたことのある懐かしさ、なにかほっとするような暖かさを曲中のすずから感じます。

いわゆる5感(視覚、聴覚、触覚、臭覚、味覚)はそれぞれちがった形の記憶を持っており、自分を自分として記憶している最も古い時点より以前の記憶、意識の裏側ともいえるのかも知れません、にふと出会った時、これどっかでみたことがあるなあとか、なんとなく知っている音だとかいう体験は人間だれしも持っているのではないかと思います。曲中のすずはどこかできいたことがあるなあとという気持ちをよびおこしてくれます。

21世紀 マーラーは1860年に生まれ、1911年に世を去りました。彼の作曲中大きな位置を占める交響曲は1888年に作曲された1番の交響曲(巨人)から始まって、10曲あります。(最後の交響曲は未完となった。)

マーラーはウィーン国立歌劇場の芸術監督として多忙であった1898年から、国立歌劇場をあわせてウィーン・フィルハーモニックも指揮するようになりました。そうした激務の中で、この時期のマーラーは創作に専念することができませんでした。

1899年7月中頃になってようやく第4交響曲の構想にはいります。紆余曲折があり、1900年8月に現在の形の交響曲が完成しました。

あと数年で20世紀も終わろうとしているが、この第4交響曲が作曲されてから100年がたとうとしていることは何を意味するのだろうか。たった100年なのかもう100年なのか。

ソロ 第4交響曲の特徴としては、さまざまなソリストの登場があげられます。2楽章のソロバイオリンは通常の調弦より1音高く調律して演奏します。他楽章の喜びとは違い、一瞬みえかくれする恐怖感を表現しています。

4楽章のソプラノはまさに「天国の喜び」を歌いあげており、曲全体もソプラノとともに消えるようにおわります。

第4楽章 歌詞対訳

Wir genießen die himmlischen Freuden,
Drum thun wir das Irdische meiden
Kein Weltlich' Getümmel
Hört man nicht im Himmel!
Lebt Alles in sanftester Ruh',
In sanftester Ruh'!
Wir führen ein englisches Leben!
Sind dennoch ganz lustig
Ganz lustig daneben!
Wir führen ein englisches Leben,
Wir tanzen und springen,
Wir hüpfen und singen, wir singen!
Sankt Peter im Himmel sieht zu!

◇

Johannes das Lämmlein auslasset,
Der Metzger Herodes drauf passet!
Wir führen ein geduldig's,
Unschuldig's, geduldig's,
Ein liebliches Lämmlein zu Tod!
Sankt Lucas den Ochsen thät schlachten
Ohn' einig's Bedenken und Achten,
Der Wein kost kein Heller
Im himmlischen Keller,
Die Englein, die backen das Brot.

◇

Gut' Kräuter von allerhand Arten,
Die wachsen im himmlischen Garten!
Gut' Spargel, Fisolen
Und was wir nur wollen
Ganze Suhüsseln voll sind uns bereit!
Gut' Apfel', gut' Birn' und gut' Trauben!
Die Gärtner, die Alles erlauben!
Willst Rehbock, willst Hasen
Auf offener Straßen
Sie laufen herbei!
Sollt ein Festtag etwa kommen
Alle Fische gleich mit Freuden Angeschwommen!
Dort läuft schon Sankt Peter
Mit Netz und mit Köder
Zum himmlischen Weiher hinein.
Sankt Martha die Köchin muß sein!

◇

Kein' Musik ist ja nicht auf Erden,
Die uns' ver verglichen kann werden,
Elftausend Jungfrauen
zu tanzen sich trauen!
Sankt Ursula selbst dazu lacht!
Kein' Musik ist ja nicht auf Erden,
Die uns' ver verglichen kann werden,
Cacilia mit ihren Verwandten
Sind treffliche Hofmusikanter,
Die englischen Stimmen
Ermuntern die sinnen,
Ermuntern die Sinnen!
Daß Alles für Freuden,
Für Freuden erwacht.

私たちが楽しんでいるのは天国の喜び
だから、地上の俗な暮らしは避けている。
俗世のやかましい騒ぎなどひとつも
天国にいと聞こえてきはしない！
何もかもこよなく穏やかに安らいで
こよなく穏やかに安らいで生きている！
私たちがおくらしている暮らしは天使の生活！
そればかりか 実に愉しく
実に愉しく朗らかな私たち！
私たちがおくらしている暮らしは天使の生活、
踊ったり、とんだり
はねたり、歌ったり、私たちは歌う！
天国の聖ペテロさまが眺めているなかで！

◇

ヨハネが子羊から目を離さないか
虐殺の暴君ヘロデは待ち窺っている！
私たちのすることは 忍耐強い
いまだ罪を負わずにいる 寛容な
愛らしい子羊を死に導くこと！
聖ルカさまときたら ためらわず
よく考えもせず牝牛を殺して肉にしてくれ、
お酒も天国の酒蔵では、
まるでただ、
小さい天使たちがパンを焼いてくれる。

◇

類いさまざまなおいしい野菜もあって
天国の庭園に生えている！
上等のアスパラガスに 隠元豆、
ほしいものは何でもあって、
深いお皿にいっぱい揃っている！
おいしい林檎、おいしい梨においしい葡萄！
庭守りたちは好きだけ取らせてくれる！
鹿がほしけりゃ 兎がほしけりゃ
誰はばからず悠々と
動物たちのほうから駈けよってくる！
お祝いお祭りの日ともなれば
魚もこぞって喜びながら泳いでくる！
待ってましたと聖ペテロ
網に餌つけ 天国の
生け簀のなかに走りこむ。
料理は何といってもマルタさま！

◇

音楽も、地上のいずこを探しても
こちらのものと肩を並べるものなどない。
一万一千の処女たちが
思いのままに踊ってる！
聖ウルスラさまご自身もつい誘われて笑ってる！
音楽も、地上のいずこを探しても
こちらのものと肩を並べるものなどない。
聖ツェツィーリアとその一族は
類いまれなる宮廷音楽団！
天使たちの歌声が
五官のすべてを醒ますので、
五官のすべてを醒ますので、
何もかも、喜びのため
喜びのために 目を覚ます。

本日の出演者

第一ヴァイオリン

石井 久雄
 1 鈴木 薫
 2 鈴木 淳子
 3 堂本 祐司
 4 永田 匡
 5 二宮 伸雄
 6 福原 祥子
 7 松延 裕子
 雪浦 玲子
 8 横田佐貴絵
 9 渡辺千恵子
 トウ 相原 美音
 河原 寛

第二ヴァイオリン

1 石本 恵理
 2 亀井 玲子
 3 須永 恒雄
 4 堤 哲児
 5 根守 和弘
 6 久田しげ子
 松山 和子
 10 三木美千子
 7 溝田 範子
 8 村上 葉子
 9 村田 康子
 山岸 万紀
 11 岩田
 12 深沢
 13 石井

ビオラ

内田 綾美
 江田 愛
 高橋 行継
 竹内ひとみ
 星 乗昭
 村上 賢一
 横田 行雄
 若林 繁
 渡部 玲子
 奥和田英二

チェロ

池田 寛之
 沢田 恵子
 田頭 扶
 沈 静珍
 中村 公一
 南明由美子
 根岸 朋子
 樋口 進
 福原 耕二
 横田 朝之
 渡辺 潔
 奥和田久美

コントラバス

池田 和正
 菊池 克彦
 鈴木 重則
 村上 信乃
 山木 和広
 李 隆子
 宮本 彰
 内田 葉子

フルート

木村 純一
 木村真論紀
 佐藤 洋行
 篠原 梨恵

オーボエ

荒井 淳
 鈴木 宏子
 二村 直子
 山地 順子

クラリネット

一瀬 直美
 多田 準也
 時田 雄
 半藤 嗣人
 吉野 智久

ファゴット

金坂 哲
 菅原 斉
 小島 厚
 戸川 安道

ホルン

越塚 康央
 近藤 利昭
 嶋村 恒夫
 林田 朋子
 藤井 茂司
 丸田 朗
 水田ひろし
 山本 恭子
 山内 正晴

トランペット

安藤 宣明
 一桝 泰一
 新井本昌宏

バストランペット

牛渡 克之

トロンボーン

久保 昭
 藪崎 裕至
 稲沢 妙絵
 古河 一仁
 坪野 富穂

チューバ

渡辺 鉄雅

ティンパニー

岩橋 正治
 木村 範子
 瀬川 順子
 都筑 裕
 萩原 和也

ハープ

小橋かおり

市川市 市民憲章

わたくしたちは 江戸川の流れと松の緑に象徴される郷土市川と その自然を愛し
 由緒ある史跡と伝承をまもり育て 文教都市にふさわしく 教育と文化を重んじ
 人間性豊かな調和のとれた明るいまちをつくるために つぎのことを定めます

1. きれいで 安全な より住みよいまちを つくります
 1. 親切で あたたかい 希望にみちたまちを つくります
 1. 教育と文化をそだて かおり高いまちを つくります
 1. 健康で 楽しく働く たくましいまちを つくります
 1. みんなの幸せを願い 豊かな福祉のまちを つくります

昭和52年11月3日制定